福岡教育大学紀要，第65号，第６分冊，１－８（2016）

音楽アウトリーチ活動の実際と展望
―福岡県宗像地区での実践を通して―

Present State and Future Prospect of Outreach Activities
― A Practical Report of Cooperation Project with Munakata Area, Fukuoka Prefecture ―

原　　尚　志　　**山　中　和佳子**　　**木　村　次　宏**
Takashi HARA　　Wakako YAMANAKA　　Tsugihiro KIMURA
（音楽教育講座）

（平成27年９月28日受理）

要　　約

本研究は，平成 26 年度福岡教育大学研究推進支援プロジェクト『「音楽アウトリーチ」による地域学校現場との互恵関係の構築』の取り組みについて考察・検討し，その成果と課題をまとめたものである。大学の近隣である宗像地区（宗像市・福津市）での実践を通して，本学学生及び教員による地域や学校での音楽アウトリーチ活動が，1）大学生の音楽教育実践力の育成，2）地域の文化振興，3）学校教育現場の音楽教育の質的向上，などに有効に機能することが明らかになった。このような活動を継続的に推進し，地域学校現場とのより望ましい互恵関係を構築していくために，大学としては今回のプロジェクトで得られた成果を踏まえ，今後も積極的に交流の場を設けながら，多様なニーズに応じたプログラム開発，求められる人材の育成，財政的支援などについて更に検討を重ねることが必要である。

キーワード：アウトリーチ活動，互恵関係，学校音楽教育，地域貢献

1. はじめに

福岡教育大学は，平成 21 年度に大学近隣の宗像市・福津市教育委員会及び宗像地区小・中学校と連携事業連絡協議会を発足し，共同研究や学生ボランティアの派遣などの事業を展開している。その中で学校教育現場からのニーズの一つとして，音楽科においては実技指導に対する支援の要請が少なくなく，これまでゲスト・ティーチャーなどとして授業や学校行事における音楽活動の指導支援に取り組んできている。また地域との連携に関しては，音楽教育講座として，数年前より公益財団法人宗像ユリックスで無料コンサートを開催するなど広く市民に公開してきている。さらに平成 26 年度は宗像ユリックス主催による音楽アウトリーチ「いきいき出前コンサート」や「ミアーレ音楽祭」などの事業にも参加した（写真 1）。

このような状況の中，平成 26 年度においては，それまでの実績を踏まえながら，本学音楽教育講座の人的資源を活用し，地域の音楽振興及び学校音楽教育の向上の支援を図るための「音楽アウトリーチ活動」をさらに推進するために，福岡教育大学研究推進支援プロジェクト経費を受けて，『「音楽アウトリーチ」による地域学校現場との互恵関係の構築』というテーマで研究に取り組んだ。

社会連携 宗像ユリックスとの連携

福岡教育大学では、本学が有する知的・物的・人的資源を活かしながら地域の様々な活動に寄与することを目的として、自治体や教育委員会等と連携協力協定を締結し、様々な連携事業を実施しています。
今年では、宗像市にある公益財団法人宗像ユリックスとの音楽アウトリーチ活動について紹介いたします。

福岡教育大学音楽教育講座
音楽アウトリーチ活動報告

原　尚志（音楽教育講座准教授）

福岡教育大学音楽教育講座では、今年度、宗像地域の学校現場やデイケアー施設等でのアウトリーチ活動を企画運営してきました。今回は宗像ユリックス「いきいき出前コンサート」と「平成26年度学長裁量経費：「音楽アウトリーチ」による地域学校現場との互恵関係の構築」の取り組みについて簡単にご紹介したいと思います。そもそもこれらの活動を始めたいと思ったきっかけは、学生達の「学外でもっと演奏できる機会が欲しい」といった要望からでした。またそれと同時に、宗像ユリックスさんから「教育大の音楽科の学生の皆さんと何かー緒に活動できないか」との お話を頂き、ちょうどタイミングよくお互いの思いが重なり、「これはやるしかない!」と一念発起して始めました。

まず、宗像ユリックスで取り組まれている「いきいき出前コンサート」という音楽アウトリーチ活動の一環として、宗像市内のデイケアー施設4か所で訪問演奏を行いました。

平成26年11月24日に<さわやかさなかたのもり>で開催されたコンサートでは、ピアノ連弾や声楽・弦楽器等によるプログラムで演奏に臨みました。

「平成26年度学長裁量経費」による活動としては、宗像市と福津市の小学校で訪問演奏を行いました。平成26年12月18日に開催した宗像市立南郷小学校での音楽アウトリーチでは、本学教員である山中和佳子講師によるフルート独奏をはじめとして、学生のピアノやヴァイオリン演奏等のプログラムを企画して演奏に臨みました。

これらの活動を行う場では、聴き手の多くはクラシック音楽の<生の演奏>に触れたことのない方々がほとんどです。そういった意味で今年度のアウトリーチ活動を通じて、クラシック音楽の生演奏の素晴らしさ・楽しさ等を伝えていくことの大切さを再認識することができましたし、学生達にとっては何よりも"音楽をすること"の意義とともに、企画力や演奏力の向上に大いに役立つ貴重な経験であったと実感します。

来年度以降もぜひこのような地域に根差した音楽活動を継続していきたいと思っております。

「アウトリーチ活動」とは
国民の研究活動・科学技術への興味や関心を高め、かつ国民との双方向的な対話を通じて国民のニーズを研究者が共有するため、研究者自身が国民一般に対して行う双方向的なコミュニケーション活動を指します。（平成17年4月　科学技術・学術審議会　基本計画特別委員会による「第3期科学技術基本計画」の重要論点（中間とりまとめ）より）

"まちぜつけ"を熱唱中の劇団志賀教授

宗像市立南郷小学校での音楽アウトリーチ

経済後出演者全員で

写真１　宗像ユリックスとの連携事業
（大学広報誌『Joyama News；2015 vol.32』より）

本プロジェクトでは，本学教員や学生による地域社会及び学校現場での「音楽アウトリーチ」活動を通して，地域の文化振興や学校音楽教育の質的向上（活性化）などの支援を図るとともに，そこでの取り組みと教員養成大学である本学の実践的キャリア教育（地域及び学校で求められる人材の育成）とを有機的に連携推進させることによって，大学と地域社会及び学校教育現場との望ましい互恵関係の構築を図ることを目的としたが，具体的には，図１のプロジェクトの取り組みの概要で示したように，本学教員や学生が大学周辺の宗像地区（宗像市・福津市）の地域や学校を中心として音楽アウトリーチ活動を展開し，地域の文化振興や学校音楽教育の質的向上（つまり児童生徒の音楽経験の拡充や深化）の支援を図る一方で，大学側としてはそれらの貴重な経験を通して学生の教育的思考を基盤とした音楽教育実践力（ここでは，企画力･演出力･演奏力・省察力・指導力などを含む力）の育成を目指そうとするもので，双方の相互利益を探求する取り組みを推進するものである。

2. 音楽アウトリーチ活動に関する基本的な考え方

我が国においては，1990 年代後半以降，アウトリーチ活動の考え方や諸外国の事例が紹介されるようになり，音楽（教育）の分野においてもその活動や研究が活発になってきている。そのような中，文部科学省の資料においてもこの“アウトリーチ”の概念や取り組みについて，次のような記述が見られる。

アウトリーチとは，リーチ・アウト（reach out）という言葉が名詞化された言葉であり，もともとの意味は「手を伸ばす，差し伸べる」などである。欧米では普通に使われている言葉であり，アウトリーチ活動は，科学技術に限らず，芸術，医療，福祉などの分野でよく行われる。
アウトリーチ活動・・・国民の研究活動・科学技術への興味や関心を高め，かつ国民との双方向的な対話を通じて国民のニーズを研究者が共有するため，研究者自身が国民一般に対して行う双方向的なコミュニケーション

音楽の分野では，音楽家を学校や福祉施設に派遣してコンサートを行ったり，各地の文化施設や音楽団体が鑑賞事業やワークショップなどを行うなど，その活動が全国に広がっていった。特に学校においては，生の演奏を直接鑑賞したり，ワークショップなどの「教育普及活動」を通して，芸術体験の機会を提供することで，芸術（音楽）分野が学校教育の大きな柱の一つである“豊かな人間性の育成”に大いに貢献することができる。特に近年の芸術系教科の授業時間の縮小という厳しい現実の中で，このアウトリーチ活動の活用は児童生徒の感性を育むための教育の方法として大いに有効であると考えられる。

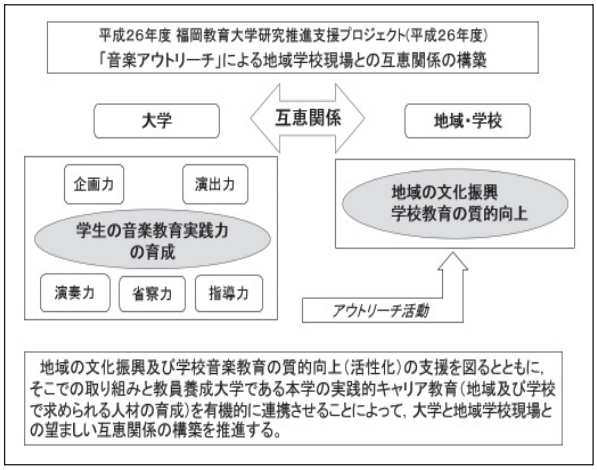

図１　本プロジェクトの取り組みの概要

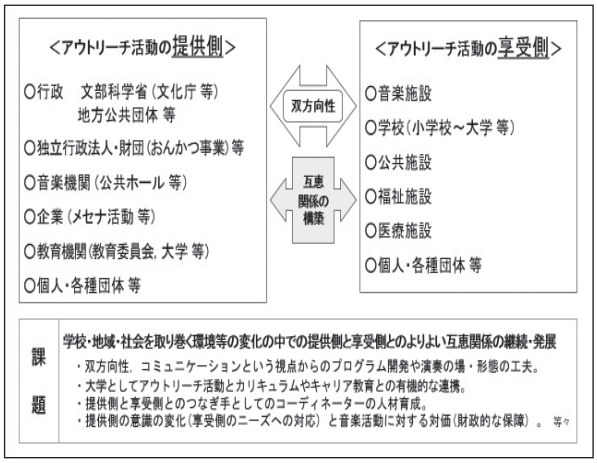

図２　アウトリーチ活動における提供側の課題

ところで，音楽アウトリーチ活動は，今までこれらの取り組みは地域や学校にプロの音楽家や音楽を専門とする（音楽科の）学生が派遣されて，演奏会を催すというイベント的なものが中心で，継続的なものでなかったりするケースも少なくない。それは文化・芸術をより多くの住民や子どもたちに提供するという視点から，文化施設や芸術団体，大学側から地域や学校にアプローチする側面が強調されてきた結果，実際に教育や地域の現場で効果があるのか，またどのような効果が生まれているのかについて十分に検討されてこなかったということが一つの原因として挙げられる。教育的・社会的状況が急激に変化する中で，音楽アウトリーチ活動において提供側と享受側のよりよい互恵関係を継続・発展させるためには，大学を含め提供側としては，享受側の多様なニーズに応じたプログラム開発，双方のつなぎ役としてのコーディネータの人材育成，財政的支援などの課題について，更に検討を重ねることが必要である（図 2）。

齊藤（2013）は，図３のように音楽アウトリーチ活動を三つの階層（鑑賞系・創造系・技術指導系）に分類することを試みているが，従来，割合が多かった〔鑑賞系〕の「鑑賞型」プログラムから，提供側と享受側が交流する中で享受側が積極的に関わる「参加型」，また〔創造系〕として分類されている提供側が享受側に創造的なワークショップ活動や体験活動を仕組んだりする「参加型（単発・集中）」や，協働して音楽や演奏をつくっていこうとする「協働型（継続･長期）」，さらにゲスト・ティーチャーとして演奏技能の向上を支援する〔技術指導系〕の「合唱型」，「器楽型」，「伝統音楽型」など，享受側の多様なニーズに伴い，その活動も広がりを見せている。

本プロジェクトでは，今後これらの活動を推進させるためのスタートアップ研究として，学校音楽教育現場のニーズに対応するために，まず従来の鑑賞系「鑑賞型」プログラムの充実を図るとともに，さらに提供側と享受側が積極的に交流し，児童生徒が積極的に活動に関わる「参加型」プログラムを試行し，その取り組みについて実証的検討を行った。

（木村次宏）

3. アウトリーチ活動の企画・運営と年間プログラムの構築

本項では，福岡教育大学の３名の大学教員と８名の大学院１年生（適宜，院２年生を含む）による実践現場に即したアウトリーチコンサート企画・運営と年間プログラムの構築を中心的課題とし，教員のアクションリサーチを通して①教員の支援のあり方，②アウトリーチの実践を通じて育つ音楽教育実践力，③年間実践プログラムの実証と課題について検討する。これらの研究を進めるにあたっては，アウトリーチ活動の実践記録の質的研究法による分析，学生に対するアンケート及び聴き取り調査の実施と分析を研究方法とする。

本研究では，木村が前項で示した図３のうち，「鑑賞系」の「鑑賞型」を軸として具体的な活動内容を学生に企画させた。なお，本研究では１年間を研究対象期間として，３名の教員の大学院授業内にアウトリーチに関する講義・演習時間を組み込みながら，教育現場における音楽学習の実態把握，及びアウトリーチコンサートの観察と演奏プログラムの作成，小学校での実践を行った。

(1) 教員の具体的な支援内容と改善課題

１年間のアウトリーチ実践における本学３名の教員の支援は，①実施校との連絡，②授業内でのアウトリーチに関する講義・演習，学生による学校現場の実態把握の支援，③実際のアウトリーチ活動の見学補助と振り返り，④演奏プログラム作成及びリハーサル時の学

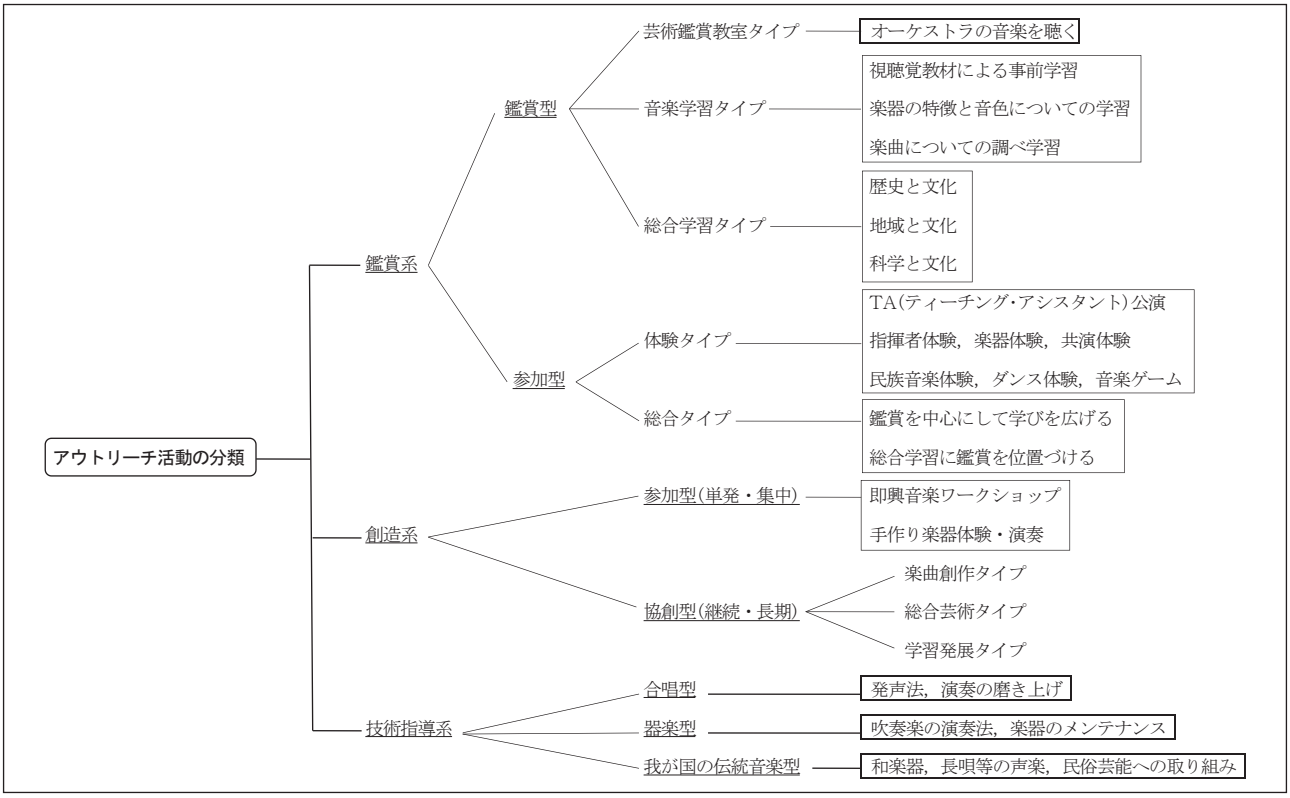

図３　音楽アウトリーチ活動の分類

生への助言，⑤実際の演奏，その他として活動に必要なレンタカーなどの手配及び送迎にまとめられる。

①実践校との連絡

前期中に宗像地区の小学校現場にアウトリーチ実践の希望を募り，3校決定を行った。さらに，実施校に出向き，学校の規模や演奏場所の特徴，対象学年と実践内容の要望の聴き取りを行った。それを授業内で学生に伝え，演奏プログラム作成の視点の一つとさせた。

②授業内でのアウトリーチに関する講義・演習，及び学生による学校現場の実態把握の支援

教育現場に対応できる学生の演奏プログラムの構成力を育てること，及び楽曲を児童生徒に説明する際にわかりやすく伝えるための音楽的な言葉を習得することを狙いとして，大学院の授業内で，アウトリーチの意義や現在の活動状況の概要等を学習するとともに，小学校音楽科教科書の分析を前期の授業内で実施した。特に，学習指導要領の〔共通事項〕に含まれる音楽用語や鑑賞領域の学習内容に焦点を当てた。また，附属小・中学校の授業を実際に見学させ，児童生徒の生活態度や授業過程で教師の児童生徒に対するコミュニケーションの取り方を理解させた。

③実際のアウトリーチ活動の見学補助と振り返り

公益財団法人宗像ユリックス主催（平成27年4月から本学と協定を締結）の「いきいき出前コンサート」に出演しているプロの演奏家の「音楽アウトリーチ」を対象として，計3回の実地見学を行った。これについてはプロの演奏家の演奏力を体感するとともに，プログラム全体の進め方や児童生徒とのコミュニケーションの取り方，曲間に話す内容などに留意して見学させ，本番終了後には実際に演奏者との質疑応答を行った。

④演奏プログラム及びリハーサル時の学生への助言

演奏プログラム作成及びリハーサルでの助言については，主に授業内で行った。その手順は，「担当教員の授業の枠の中（3回程度）でプログラム作成を学生一人一人に課す→各学生が作成したプログラムを授業で発表→発表されたプログラムを基に実際に学校現場に対応できるプログラムを3パターン作成→プログラム決定後，各自，譜読み及びMC原稿を作成→各本番に至るまでに1，2回のリハーサルを実施し，主に曲目説明等のMCの内容と読み方について助言」である（注：リハーサルは学生が授業外で複数回行った）。

⑤教員による実際の演奏

学生からの依頼を受け，プログラム内容の充実を図るために教員が演奏で実際に参加した。

(2) 教師の支援における改善課題

これらの教師の支援内容から明らかになった改善課題のうち，4点を以下に示す。

・各教員の以前から担当していた授業時間内に組み込んだため，授業枠を超えた関連学習やPDCAサイクルを行うことが困難であった。実践的演習の授業として連続性を図る必要がある。
・実施校への連絡は，ほとんどの場合教員が行ったため，演奏場所や児童生徒の雰囲気の把握は写真や伝言のみとなった。学生の意識づけや意欲向上，責任感向上のためには，学生とともに連絡及び訪問を行う必要があると思われる。
・音楽科教育の学習内容とアウトリーチでの演奏曲とをどのように関連付けているのか，あるいは教科内容とは関連付けずに他の視点からプログラム作成を行うのかを，各回に応じて明確に共有しておく必要がある。
・教育現場の観察により，児童とのコミュニケーションの取り方や児童に対する話し方などは参考になったものの，実際のMCでは個々の能力によるところが大きかったため，演奏技術だけでなくMCに対する指導をさらに行っていく必要がある。

(3) 各コンサートの概要とこれらを通じて育つ学生の音楽教育実践力

①前期期間の平成26年7月15日（火）福津市立勝浦小学校体育館にて実施。出演者：大学院1年生7名，院2年生1名（芸術課程音楽コース）。

学生には学校側から「全学年対象，演奏時間35分構成，楽しそうなコンサート名にしてほしいこと，演奏場所は体育館の床，控え場所は子どもたちの前，親しみやすい曲構成，MCを入れてほしい」という学校現場の特徴と要望を伝えた。表1は，これらを踏まえて学生が作成した演奏プログラムである。

②後期期間第1回目：平成26年11月6日（木）福津市立津屋崎小学校体育館で実施。出演者は大学院1年生7名，院2年生2名（芸術課程音楽コース），教員2名。

対象学年の要望が1年生・2年生及び3年生・5年生このためプログラムを2パターン準備した。

この小学校には，出演した院2年生の学生が非常勤講師として務めていたため，教員ではなくこの学生が学校とのやりとりを行った。表2は3年生及び5年生に対して行ったプログラムBの内容である。

表1　コンサート名　サマーコンサートIn勝浦小～音のピクニック～

1. ヴァイオリンとピアノ：チャルダッシュ　Cモンティ作曲
2. 2本のヴァイオリン及びピアノ：Under the Sea
3. テノール独唱とピアノ：花　瀧廉太郎作曲
4. テノール独唱とピアノ：O Sole mio　ナポリ民謡
5. ピアノ：子犬のワルツ　ショパン作曲
6. ピアノ連弾：動物の謝肉祭より　サン＝サーンス作曲・ライオンの行進，めんどりとおんどり，ラバ，フィナーレ
アンコール：（児童と一緒に《さんぽ》を斉唱）

表２　プログラムＢ（対象学年３・５年生）40 分程度

1. ヴァイオリンとピアノ：チャルダッシュ　C モンティ作曲
2. コントラバスとピアノ：「動物の謝肉祭」より《象》サン＝サーンス作曲
3. ピアノ：ゴリウォークのケークウォーク　ドビュッシー作曲
4. テノール及びバリトンとピアノ：ふるさと　岡野貞一作曲
5. バリトン独唱とピアノ：まちぼうけ　山田耕筰作曲
6. ヴァイオリン３挺，フルート，コントラバス，ピアノ：チャイコフスキー作曲「くるみ割り人形」より・行進曲・葦笛の踊り・トレパーク
7. アンコールとして校歌斉唱

表３　プログラムＡ（対象学年１年生）35 分

1. 連弾：チャイコフスキー作曲「くるみ割り人形」より・行進曲・トレパーク
2. ソプラノ独唱とピアノ：たき火　渡辺茂作曲　唄　山田耕筰作曲
3. ヴァイオリン３挺とピアノ：フィドルファドル　アンダーソン作曲
4. フルートとピアノ：歌の翼による幻想曲　シュテックメスト作曲
5. 全員合唱：ふるさと　岡野貞一作曲

③平成 26 年 12 月 18 日（木）宗像市立南郷小学校音楽教室で実施。出演者：大学院１年生８名と院２年生２名，教員１名。

対象学年は１年生及び２年生・３年生であったため，今回も２パターンのプログラムを準備した。学校現場からは，教科書内容との関連性を意識したプログラム構成と，華やかな舞台衣装で演奏することが要望として示された。表３は１年生に対して行ったプログラムＡの内容である。

④実践に関する学生の意見

第１回目の実践が終わった後，学生に聴き取り調査を行った結果，アウトリーチコンサートに関する反省とアイディアとして児童とのかかわり方，鑑賞空間の設定，MC に関するものが多く挙げられた。

児童との関わり方については，楽器に触ったり質問を受けたりする時間の設定や移動しながら演奏するとよいのではないか等，鑑賞空間の設定については，演奏者との距離や，聴く体勢を変えてみてはどうかという案が出された。

MC ついては反省点が多く指摘され，「伝えたいことをはっきり伝える。ざっくりした問いかけではなく，明確に」といったことや「もっと演奏者が呼びかける」等，積極的な働きかけが必要であることを感じていたことが聞き取れた。

また，３つのアウトリーチ活動を終えた後に出演した学生全員に行ったアンケート調査では，以下のような成果と課題に関する意見が示された。

・間合い，反応，集中力等，実際にその場でやってはじめてわかることが多かった。
・他の人の MC や演奏を見ることで，その場で自分の参考にすることができた。
・どうしたらお客さんが楽しめる（ためになる）プログラムになるかを考える事は，こういう機会が無い限り，経験することができずいい勉強になった。
・面白いと子どもの反応が違うので，演奏者は常に本気で取り組むことが大切。
・練習不足。出演者内での話し合いや，それ以外の人からの意見の見直しが必要。
・MC の語り方が堅い感じがした。演奏を「こなしている」という印象があった。
・各楽器の魅力を子どもたちがじっくり感じることのできないまま終わってしまったのではないか。

課題解決に対する手立てとしては，以下のような意見が示された。

・意識や使命感を持って演奏に臨むこと。参加学生各自がアーティストとしての自覚を持って，最高の演奏を届けるんだ！との強い思いをもつ。
・参加メンバーとの連携の強化。
・演奏コンセプトや目的の明確化。
・学校現場のこどもたちの実態の把握。
・参加学生自身が他団体の公演を鑑賞する。
・次からも演奏に呼ばれるようなシステムを作る。
・HP などで告知する。

これらの意見からは，学生たちがプログラムや MC で話す内容等を構成する際に，聴き手の特徴を踏まえることの重要性を感じとった様子や，他者の実践を観察することが自分の実践を省察する視点づくりになっていたことが読み取れる。また，通常の演奏活動とは異なり，活動の趣旨や意義を大切にして演奏に臨む必要があることを認識した様子が伺える。

さらに，一つのコンサートの内容の充実に対して意欲的な意見が見られたと同時に，アウトリーチ活動を今後継続的に行うという視点からみた課題が提示されており，短期的・長期的な企画力の必要性を感じていることが読み取れる。

以上のことから，他の学生と共に行ったこのアウトリーチ活動が，学生たちにとって，演奏力だけでなく聴き手に対するコミュニケーション力やコンサートの演出力，また自らの実践を振り返る省察力を育成する上で，有意義な活動であったことが指摘できる。

(4) 年間実践プログラムの実証と課題

本研究によって，図４のような１年間を通じた大学におけるアウトリーチ実践プログラムが実証された。音楽アウトリーチ活動を行った三つの学校からは，また来年も実践してほしいという要望を受けた。実際に生の素材や音に触れて五感を活性化させることが高い教育的効果を生み出すことは，周知の事実である。こ

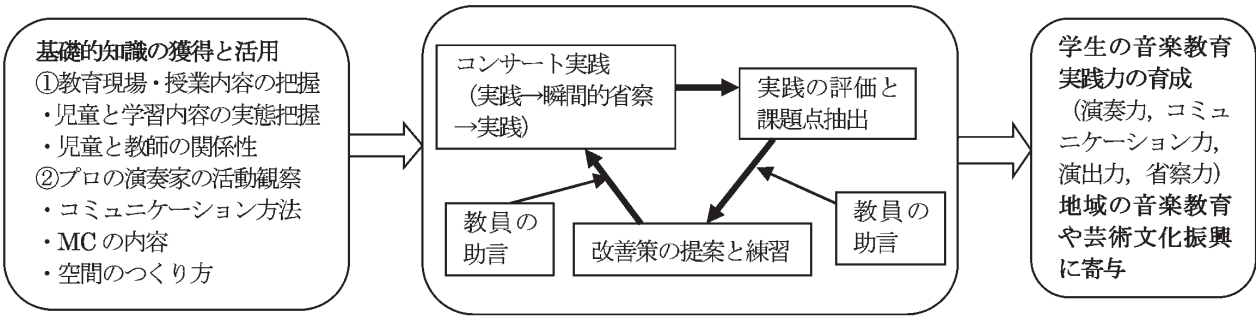

図４　本学での１年間のアウトリーチ実践プログラム

のように，教員養成大学としての本学の実践教育と地域での音楽活動を関連させた音楽教育実践を行うことは，大学と学校教育現場双方にとって有意義な互恵関係を構築する第一歩となったと思われる。

しかし，年間プログラムを実証する中で，１年間での大学院１年生全員に対する実践経験の確保，実践において教員が関わる範囲の明確化，時間的制約を踏まえた大学院の授業内容への導入といった課題が残った。その解決のためには，各教員の連携とアウトリーチに関する学習と演習内容の精選と系統づけを行い，長期的な視点で学生の実践力の育成を見据える必要がある。

さらに，学校音楽教育現場の多様なニーズに対応するために，「鑑賞型」の演奏プログラムの充実を図るとともに，大学と学校現場が積極的に交流し，聴き手が活動に加わる「参加型」演奏プログラムや，参加者と実践者が共に音楽を楽しみ合う「創造型」の演奏プログラムを行う環境作りが必要である。

（山中和佳子）

4. 演奏家の視点からの音楽アウトリーチ活動の捉え方 ー実践を通してー

本稿では，演奏家の視点で小学校及びデイケア施設での演奏を通して，鑑賞型プログラムにおける生演奏の必要性について述べていく。筆者自身，声楽家としてこれまで，様々な演奏会に出演或いは企画をして，聴衆に喜ばれる音楽を提供してきた。その中で，演奏会会場に足を運ぶことができない人にも音楽を提供できる機会の必要性を考えてきた。そもそも，クラシック音楽そのものに興味をもつ人々は，非常に少ないのが現状である。その中でより多くの人にその素晴らしさを感じてもらうために何ができるのか，或いはどのようなプログラムが求められるのかについては，常に考えているところである。

(1) 演奏家による音楽アウトリーチ活動の共通点

今回，音楽アウトリーチを実践するにあたり，複数の演奏家のアウトリーチ活動の様子を見学する機会を得る事ができた。その中で，宗像ユリックスが主催している「いきいき出前コンサート」に出演している様々なジャンルの演奏家のアウトリーチの実演を見学することは大きな収穫であった。見学した演奏家によるアウトリーチの実践における共通点として，以下の３点が指摘できる。

①クラシック音楽だけに留まらず，聴き手が興味のあるジャンルの作品をプログラムに取り入れている（例えば，映画音楽やミュージカル，童謡等）。

②一方で，純粋にクラシック音楽の作品も必ず取り入れている。

③アウトリーチの本番時に必要なMCを組み込んでいる。

特に③の項目については，同じ演奏プログラム内容であっても，聴き手の年齢層の違い（小学生，高校生，高齢者等）によって，その内容を少し変化させ，曲目の説明を行っていた。実際に演奏する側に立った時に，この項目についての実践が最も困難を極めた。この経験から，学生には常に自分の言葉でその作品のもつ魅力について分かり易く語ることを徹底させた。このことによって，音楽アウトリーチの実践回数が増すにつれて，学生のMCに対する不安感は払拭できた。

(2) 小学校及びデイケア施設での演奏について

宗像ユリックスでの「いきいき出前コンサート」の現場見学を終えたのち，本学教員と学生とのアウトリーチ活動を展開していくこととなった。ここでは，山中が前項の表２プログラムＢで示しているプログラム及びデイケア施設で，筆者が演奏した声楽作品について述べていく。

福津市立津屋崎小学校では２ステージ（1･2年生対象と５年生対象）を行ったが，筆者は５年生対象のプログラムに出演した。演奏曲は山田耕筰作曲の《待ちぼうけ》を取り上げた。この作品を取り上げた理由は以下の通りである。

①旋律が単純かつコミカルである。

②詩の内容が教育現場にマッチしている。起承転結がはっきりしている。

③小学校の教科書に鑑賞教材として掲載されている。

演奏の前に，この作品の詩の世界について説明した

が，児童たちの理解度が十分でなかったため，敢えて主人公である農夫の心情変化に対する理解を促すために，簡単な振り演技を付けて演奏に臨んでみた。その結果，児童かのアンケートに次のような記述が見られた。

・まちぼうけは劇みたいになっていてすごいと思いました。
・座ったたり，踊ったりして，最後にくしゃみをしていました。おもしろかったです。

この曲を振り演技付きで歌うことは，実は初めての試みであった。殆ど即興演技であった。しかし，物語調に描かれている詩の世界及び農夫の心情変化を理解させるために効果的であったことは，上記のアンケート結果からも読み取ることができる。

次に演奏する上で前段階として，筆者自身が児童に対して発声原理について以下の事項を簡単に説明した。

①声楽家の生の声を聴いたことのある子どもたちは殆どいないのが現状であった。そこでまず，マイクを通した声の響きとマイクを外した時の声の響きの違いを理解させようと試みた。

②発声の構造について簡単に説明した。その際に共鳴の元となる声帯について児童に次のような質問をした。

「声帯の大きさはどのくらいだと思いますか？」
「声帯の長さによって声色が変わると思いますか？」

この２つの問いかけに対して，正しい回答は出てこなかった。そこで，この日のプログラム前半に学生によって演奏された《チャルダッシュ》《動物の謝肉祭》の演奏を例にヴァイオリンとコントラバスの音色の違いについて児童に以下の説明をした。

・弦が短くて細い方が高い音が出ていた。
・弦が長くて太い方が低い音が出ていた。

これらの説明で響きの特性確認させた上で，人間の声帯も弦楽器の振動と同じように音を出すので，短い声帯は高い音が出し易く，太めで長い声帯は低い声が出し易いということを理解させ，演奏に臨んだ。

次に宗像ユリックスが主催する「いきいき出前コンサート」についてであるが，これは宗像市内の小学校・中学校及びデイケア施設を中心に，年間約 80 箇所で様々なジャンルの演奏家が演奏会を行っている活動である。その中で本学は４箇所のデイケア施設での演奏会に出演した。これらの演奏会場では聴き手は高齢者が対象となる。そのため，プログラム構成には以下の点について，主催者側から要望があった。

①楽曲を演奏する際には，日本の歌（唱歌や童謡）を中心に構成すること。

②プログラム中に聴き手が参加できる時間を確保すること。

これら２項目を条件に，声楽曲を下記のようなプログラムの中に挿入した。

表４　プログラム一例　40 分程度

1. 連弾　ブギー・バック・トゥ・　ヨコスカ	斎藤圭土作曲　レ・フレール編曲
2. ヴァイオリンデュオ・ピアノ　愛の挨拶	エルガー作曲
3. ソプラノ独唱・ピアノ　オペラ『ジャンニ・スキッキ』　私のお父さん	プッチーニ作曲
4. テノール独唱・ピアノ　禁じられた音楽	ガスタルドン作曲
5. バリトン独唱・ピアノ　この道	山田耕筰作曲
6. テノール独唱・ピアノ　花	瀧廉太郎作曲
7. 全員合唱：ふるさとの四季メドレー	源田俊一郎編曲

①については山田耕筰作曲《この道》瀧廉太郎《花》等の高齢者に親しみのある声楽作品を取り上げた。

②についてはプログラム中に源田俊一郎編曲の唱歌メドレー《ふるさとの四季》を加え，聴き手と一緒に斉唱する演奏形式を取り入れた。メドレーの内容は以下の通りである。

岡野貞一作曲《故郷》《春の小川》《朧月夜》，文部省唱歌《鯉のぼり》《茶摘み》，小山作之助作曲《夏は来ぬ》，文部省唱歌《我は海の子》《村祭り》，岡野貞一作曲《紅葉》，文部省唱歌《冬景色》《雪》，岡野貞一作曲《故郷》。

《この道》《花》及び全員合唱《ふるさとの四季メドレー》の演奏に際して，聴衆には「それぞれの心のふるさとを思い出しながら聴いて下さい」と MC の中で話した。曲が進むにつれて，聴き手には様々な反応が見られた。黙想状態であったり，身体を揺らしながら旋律を口ずさんだり，或いは涙を流しながら聴いているなどの光景がどの会場においても見られた。このような状況は，通常のコンサートホールの舞台上からは確認することは難しい。こういった聴き手の生の反応を見られることは音楽アウトリーチ活動の醍醐味である。このような体験ができたことは筆者自身及び学生にとって，音楽とは何か？ということを再考するきっかけとなり，日々のレッスン等の授業環境では得ることのできない大きな収穫であったと言える（写真２は，活動の様子の一場面である）。

(3) 音楽アウトリーチで得られた演奏の成果と課題

小学校及びデイケア施設での演奏を通じて，それぞれの現場で求められる「音楽アウトリーチ」での様々な演奏形式の可能性を見出すことができた。

特に，筆者が小学校で演奏した《待ちぼうけ》における演技付きでの演奏は，通常の舞台ではあり得ない演奏形式であった。しかしながら，今回の活動過程で，生演奏のすばらしさを伝える際に，このような手法を用いて演奏することの有効性を示せたことは一つの成果といえる。また，MC 原稿作成の際に，何度か演奏

写真２　デイケア施設での演奏風景
（宗像ユリックス「いきいき出前コンサート」より）

した経験のある曲についても調べ直してみると，今まで自分が知り得なかった知識と遭遇することもある。こういった事例は音楽アウトリーチ活動を実践していなければ，得ることができなかったことである。

一方，演奏活動における課題として浮かび上がってきたのが編成についてである。今回は10名程度の学生全員が一つの音楽アウトリーチ活動に関わった。今後はグループを２～４名程度にし，２～３編成のグループを作り，それによって展開いくことにしたいと考えている。これが一つの理想形と考える理由としては，山中が示している前項④実践に関する学生の意見の中で，学生からの取り組みの課題として「練習時間の確保の難しさ・楽器の魅力を充分に伝えきれなかった」といったことが出されており，これらに共通している原因は１グループの編成が大きすぎたことで，それによってリハーサルの日程調整がうまくいかなかったこともあったことが挙げられる。

(4) 演奏家としての音楽アウトリーチとは

演奏に対する声楽家としてのスタンスは，演奏会の舞台に立つことや，小学校や介護施設で演奏を行うことにおいてなんら変わりはない。今回のアウトリーチ活動の取り組みを通して，「聴き手に対して，演奏作品のもつ魅力を自らの言葉で伝えることの難しさ」を改めて実感した。今後更にこのような活動を通して，工夫改善を図っていきたい。

音楽アウトリーチ活動を自分自身の音楽と向き合う機会として考えた時，演奏家は何を基準に演奏すべきかを自問自答した。「質の高い演奏をする，いい声を・いい音を出す…」。これらは演奏家として極めて当たり前のことである。聴き手はそれに対して驚きと称賛の言葉で我々を讃えてくれる。これはこれで演奏家として一つの喜びである。しかしそれ以上に大切なことは，「音楽」とは何か，と演奏家が絶えず考えることで，その「音楽」を伝えるために決して一方通行的にならないようにしなければならない。なぜならそのような態度で音楽及び聴衆と向き合うと，その間に「壁」を生み出してしまうことになりかねない。この「壁」を生み出すことなく絶えず聴衆とコミュニケーションを図ることの必要性を第一に考えるべきではないだろうか。

今回の音楽アウトリーチ活動を通して，今後も幅広く音楽の素晴らしさや楽しさを伝える機会を提供するために，学生を含め大学側（提供側）も，実践的な活動を目指すことが大切である。その中で音楽することの意味や音楽の果たすべき役割に関して常に考え続けるとともに，聴き手（享受側）のニーズに合った演奏プログラムの開発等についてもさらに検討していきたい。

（原　尚志）

5. おわりに

現在アウトリーチに関する研究も，かなり目にするようになってきている。林（2013）も今後の展望として次のように述べているが，我々の今回の取り組みも含めて，これらの蓄積されたデータを改めて整理・分析し，音楽アウトリーチの活動が，これからの地域の文化振興や音楽教育の活性化にとってより一層有効性のある取り組みとなるための研究をさらに進めていきたい。

> 1990年代後半に日本にアウトリーチが紹介されて，約15年，アウトリーチは一応の定着を見せ，導入の時代は終わったと言える。供給する側の多様化が進む中，アウトリーチの内容に目を向けていく新たな時代が始まっているのではないだろうか。

引用・参考文献

文部科学省『平成16年版 科学技術白書』第１部第３章第２節「1. 科学者等の国民との交流の推進」より

文部科学省　学術研究推進部会（第10回：平成17年６月７日）配布資料３－５「アウトリーチの活動の推進について」より

齊藤　豊（2013）「音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開 －アウトリーチ活動の目的と形態からみた分類の試み－」『音楽教育実践ジャーナル』vol.10 no.2 pp.71-79.

林　睦（2013）「音楽教育におけるアウトリーチを考える －基本的な考え方，歴史的経緯，最近の動向－」『音楽教育実践ジャーナル』vol.10 no.2 pp.5-13.